ワーク・エンゲイジメント研究の動向分析

テキストマイニングによる国際比較

○前川伸晃（福井大学学生総合相談室）・上野栄一（福井大学医学部看護学科）

キーワード：ワーク・エンゲイジメント，国際比較，看護

目　的

ワーク･エンゲイジメントは 2000 年前後から心理学や産業保健心理学の分野でポジティブな要因に注目する動きの中で提唱された概念である（島津,2017)。Schaufeli ら(2002)によればワークエンゲイジメントは「仕事に関連したポジティブな状態であり、熱意・没頭・活力の三つに特徴づけられ、一時的な状態ではなく、全般的な感情と認知である」と定義されており､健康心理学においても重要な概念となっている。海外においては活発に研究されるようになってきているが、日本においても 2006 年頃より､注目されるようになってきている。海外文献のレビューについては島津(2012)等で示されているが、日本の研究動向についての報告はない。また、日本の動向と海外の動向を比較検討した報告も見られない。そこで、本研究は、日本と海外のワーク・エンゲイジメントの研究動向について、テキストマイニングを使って比較検討することを目的とする。

なお、本研究の発表に際し開示すべき利益相反関係にある企業などはありません。また、本研究では既存の公開資料を用いた研究であるため、倫理委員会の対象ではないが、倫理的な面には十分な配慮を行って実施した。

方　法

日本の文献については、2018 年 1 月 31 日時点の Cinii において「ワーク・エンゲイジメント」をタイトルに含む論文を抽出した。海外の文献については、2018 年 1 月 31 日時点の Pubmed において「work engagement」をタイトルに含む論文を抽出した。抽出された論文の分析はテキストマイニングのソフトウェアである「KH corder」を用いて分析した。「KH corder」では、単語頻度解析、共起ネットワーク分析を実施した。

結　果

日本の文献は 94 件で、海外の文献は 236 件であった。日本の文献における単語頻度解析では、「ストレス」、「看護」「組織」「働く」「関連」「職場」といった単語が上位に見られた。一方、海外の文献における単語頻度解析では、「nurse」、「burnout」、「health」、「job」、「study」、「care」といった単語が上位に見られた。また、日本の文献における共起ネットワーク分析では、看護及び福祉の離職に関するネットワークの関連が見られた（図 1)。一方で、海外の文献における共起ネットワーク分析では、「self-efficacy」や「randomize controlled trial」、「job satisfaction」のような関連用語のネットワークが見られた。

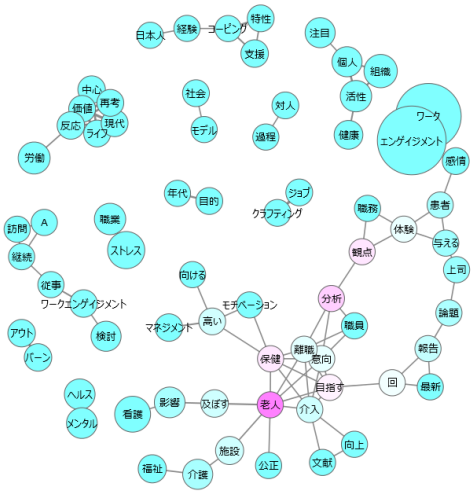

図１　日本の文献における共起ネットワーク

考　察

単純頻度解析において、ワーク・エンゲイジメントは日本・海外両方の看護分野において注目されていることが示唆された。看護分野におけるバーンアウトが世界共通で問題となっており、その対策となる考え方としてワーク・エンゲイジメントが注目されていると考えられる。

海外ではワーク・エンゲイジメントの概念を整理するような研究や、無作為統制試験による厳密な研究が行われている一方、日本においては、実践的な研究が多く、まだまだ研究は少ない現状であると考えられる。検索媒体の違いも影響している可能性はあるかもしれないが､論文の数を比較しても、日本においてはまだまだ未開の分野であると言わざるを得ない。一方で、pubmed の検索結果の中に、japanese や Japan といった単語が多く見られ、chinese、dutch といった単語より多かった。このことから、ワーク・エンゲイジメントは世界の中でも特に日本で注目されている可能性が伺える。先行研究では、日本は他国に比べて、ワーク・エンゲイジメントの得点が低い（Shimazu, A., 2010）ことが示されている。日本はポジティブな感情や態度の表出を抑制することが社会的に望ましいとされていることが一因と言われている。日本の働き方や国民性のオリジナリティが、日本におけるワーク・エンゲイジメント研究の今後の発展に影響を与える可能性もあるかもしれない。本研究において日本の看護の分野では多くの研究がなされており、注目されていることは意味があると考えられる。また、今回の量的分析では前面に出ることはなかったが、教師のメンタルヘルスの分野における研究もいくつか見られた。教育の分野における study engagement 等も、日本における発展の可能性がある分野だと思われる。

(MAEGAWA Nobuaki, UENO Eiichi)